

# 健やか Sukoyaka HOKKAIDO PROJECT

「健やか北海道プロジェクト」とは

北海道の医療・保健の向上や、道民の命と健康を守ること  
を目的に、北海道新聞社と札幌医科大学が協力して取材  
や臨床研究の成果を新聞やフォーラムなどを通じて発信す  
るため、2006年8月からスタートした共同事業。



# 未来 を 創る

## Interview

# 札幌医科大学 島本 和明学長に聞く「活力ある未来へ」

「進取の精神と自由闊達(かつたつ)な気風」と「医学・医療の攻究と地域医療への貢献」という建学の精神を掲げて歩む札幌医科大学は、この6月に開学60周年(創基65周年)を迎える。

北海道の医療と地域の未来を守るという使命を果たすため、札幌医科大学は何を守り、何を変革し、新たな未来をどのように創り上げていくのか。ご自身の学生時代の話とともに島本学長に聞いた。

## 幼いころから見てきた 赤ひげ先生とへき地医療

1950年(昭和25)年4月、札幌医科大学開学。その前身である北海道立女子医学専門学校に代わり、北海道の保健医療を担う医師の養成という重大な使命を受けてのスタートだった。「医学・医療の攻究と地域医療への貢献」それは開学から60年を迎える札幌医科大学の過去から未来に続く一



島本和明(しまもと かずあき) 札幌医科大学理事長・学長

ンテーマといえるものだ。本年4月1日に10代目学長に就任した島本和明学長にとっても道民に育てられた大学として、地域医療への貢献を第一に考えるのは当然のこと。道民の健康を守っていくためにはどうすれば良いのか、その答えを常に求めていくように語る島本学長が医師を志すきっかけになったのは、子どものころ出会った一人の医師だったという。

小樽市高島。その昔は小樽市ではなく、独立した小さな漁師町。そんな田舎で生まれ育った子どものころの島本学長。自宅によく遊びに来ていた診療所の医師のいつもかばんを持って往診して歩く姿が目に残り付いていたという。「その先生はその後開院され、先生自身も決して裕福ではないのに、黄い患者さんからお金をとらず、お金持ちの人からもらうくらいいいよ、なんて言ってるような、まさに赤ひげ先生だったんですね。」そんなへき地で汗を流す赤ひげ先生の背中から、まだ小学生の島本少年が医師を目指すべききっかけとして十分なものであった。

「北海道のどこかに困ってる患者さんがいる。特定の人だけを診るのではなく、誰に対しても公平に診ていきたい。赤ひげ先生は、本当に私にとっては医者原点ですね。」

## 新キャンパス構想で広がる 臨床、研究、教育の未来

「大学時代はバスに汽車、路面電車と毎日片道2時間かけて通学していました。たいへんでしたが毎日2時間、汽車の中で勉強できたので助かりました。3年の時から休みになると柔道部の先輩がいる本別町立病院をはじめ、日高門別、利尻、中頓別など、地方の病院に臨床実習に行き、苦労しながらも頑張っている医師の姿を早くから見えました。」と島本学長は大学時代を語る。

北海道の地域医療を守る、そんな歴史的ともいえる役割を担ってきた札幌医科大学。地域医療への貢献度と同様に高く評価されているのが、がん、免疫、再生医療などに関する研究だ。地域医療と研究、札幌医科大学のこの2つのテーマがバランスをとりながらこれからも継続されていくことが期待されている。

「札幌医科大学の未来を語る上で職員、教員が一番期待しているのは新キャンパス構想です。あと3年ほどで現中期計画も終わり4年目から新中期計画に入る予定です。新病棟や研究所、救急部、

手術室など、患者さんのアメニティーを第一に、そして教職員の働く環境も良くしたいですね。研究所も新しくなれば、現在進めている脳梗塞(のうこうそく)の骨髄幹細胞治療のような全国に発信できる橋渡し研究を前向きに進めていきたいですね。」

臨床をやっている人間は良い臨床ができる。良い医師が育ち、集まり、全道各地に積極的に送り出していく。研究している人間は新しい環境でさらに良い研究ができる。そして橋渡し研究で臨床と研究が結び付く。そんなスパイラルをイメージしながら島本学長は4年後に工事に入ることが目標だと言う。

「先進医療と地域医療の両面にさらに貢献していきたい大学にしたい。私の学長としての使命はこれにつきると思っています。」



「新しい歴史の主役は学生たち。自分たちの可能性を本学のキャンパスでぜひ試してほしい。」と島本学長







# Lectures 札幌医科大学開学60周年(創基65周年)記念講演会(道民公開講座)

2010(平成22)年、札幌医科大学は1950(昭和25)年の創設から開学60周年、前身の道立女子医学専門学校の創立から創基65周年を迎えます。

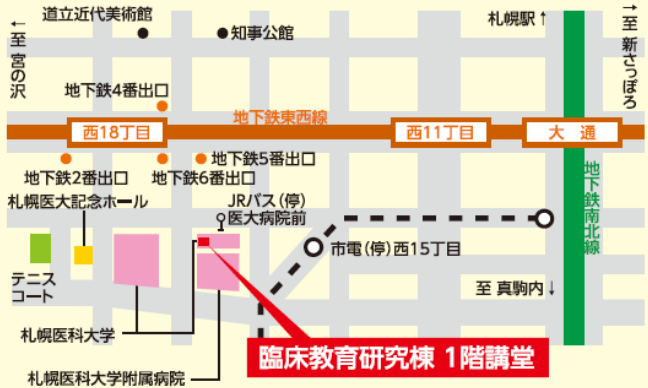
開学60周年(創基65周年)にあたり、道民の皆さまの健康・教育文化の向上に資することを目的に、記念講演会(道民公開講座)を開催します。

皆さまの参加をお待ちしております!

日時 6月26日(土) 15:00~17:00

場所 札幌医科大学 臨床教育研究棟 1階講堂

参加無料 (定員350名)



## プログラム

司会 北海道公立大学法人 札幌医科大学理事長・学長 島本 和明

### 第一部(15:10~) 「人は他人(ひと)のために生きている」



講師 丸山 淳士 先生  
五輪橋産科婦人科小児科病院 名誉理事長

札幌医科大学医学部卒業。日本産婦人科学会専門医、日本産婦人科学会北海道地方部会理事、日本産婦人科医会理事。「脱パンツ」健康法で一世を風靡(ふうひ)、パンツドクターとして北海道民に親しまれ、テレビ・ラジオなどにも出演するなど広く活躍している。

### 第二部(16:05~) 「ここまで進んだ がんの最新の診断・治療」



講師 今井 浩三 先生  
東京大学医学科学研究所 先端医療研究センター教授・  
東京大学医学科学研究所 附属病院長

札幌医科大学医学部卒業。アメリカNIH認定博士研究員、英国ケンブリッジ大学MRC研究所上級研究員、札幌医科大学医学部第一内科教授を経て、2004(平成16)年に札幌医科大学学長に就任。07(平成19)年には大学の法人化に伴い、札幌医科大学理事長・学長に就任。10(平成22)年5月から東京大学医学科学研究所先端医療研究センター教授・附属病院病院長を務める。日本癌学会会長、日本臨床分子医学会会長、日米合同癌会議会長を歴任するなど、日本のがん研究に大きく貢献するだけでなく、日本学術会議会員を務めるなど幅広く活躍している。

## 参加申し込み方法

当講演会の参加は無料となっております。電話、FAX、E-MAILからお申し込みいただけます。下記必要事項をご記入の上、申し込み先までご連絡をお願いします。なお、応募されました個人情報は、本事業以外では使用しません。

◎必要事項:1.氏名 2.住所 3.参加人数

## 申し込み先

北海道公立大学法人 札幌医科大学事務局総務課  
〒060-8556 札幌市中央区南1条西17丁目  
TEL.011-611-2111(内線2112) FAX.011-614-3732  
E-MAIL kaigaku60@sapmed.ac.jp

# Pick up 札幌医科大学医学部教育研究機器センター 細胞プロセッシング施設(CPC)

## 幹細胞で脳梗塞治療 運動まひ改善に効果

札幌医科大学は、昨年9月から脳梗塞の患者さん本人の骨髄の細胞(骨髄幹細胞)を利用して症状を改善する新しい治療法の実用化研究をスタートさせている。世界的に注目されている最先端研究であり、2006年度から行った初期臨床研究の結果を踏まえ、一般医療への普及を目的とし、10年以内での実用化を目指している。初期臨床研究は、道内外の41~73歳の男女12人を対象に実施。発症1~5カ月後に骨髄幹細胞を投与した結果、程度には差があるが、全員に運動まひの改善などがみられ、職場復帰した人もいます。

実用化研究は昨年、基礎研究を臨床治療につなげる文部科学省の「橋渡し研究推進プログラム」の一つに採択された。全国13件のうち道内では唯一。年間数十例実施する予定で、患部の大きさや部位、幹細胞の投与時期などのデータを蓄積し、効果的な治療法を確立する。神経再生医学講座の本望修特任教授のチームが担当する。



神経再生医学講座 本望 修 特任教授

## 再生医療の実現に向け CPC運用に期待

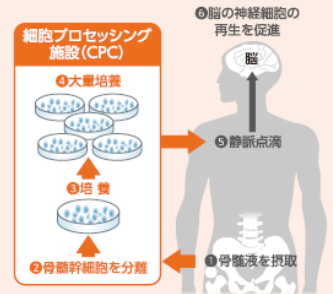
治療法は、脳梗塞の患者さんから骨髄液を採取して幹細胞を抽出。数週間かけて大量に培養した幹細胞を静脈注射で再び体内に戻すと、幹細胞は脳梗塞の患部へ達し神経細胞を再生するという流れ。この治療法は、ヒトの受精卵から取り出す胚(はい)性幹細胞(ES細胞)とは異なり、患者さん自身の細胞を使うため、拒絶反応や倫理面などの問題が少ない。骨髄液の採取と点滴は一般的な医療技術として普及しており、臨床現場への導入も容易という。本望特任教授は「発症後、長時間が経過して懸命なリハビリテーションを強いられる患者さんにとっても飛躍的な

「骨髄幹細胞は普段から人の体内で再生能力を発揮している。その自然治癒力を引き出すのがわれわれの方法」と話す本望特任教授。「後遺症で日常生活に苦勞している脳梗塞の患者さんのためにも、可能な限り早く実用化にこぎ着けたい。」

機能回復の可能性がある治療法。再生医療は人類が初めて遭遇するもの。研究者、医者、医療スタッフ、患者さんが成長していかなければならない」と話す。

今後の医療の発展の中で最も期待される分野の一つである再生医療の実現。それに向けて臨床利用可能な細胞の調製を行う施設が「細胞プロセッシング施設(CPC)」だ。札幌医科大学では、2008(平成20)年に開始した「札幌医科大学医学部教育研究機器センター 細胞プロセッシング施設」の整備が整った。施設には個別に環境の管理された細胞調製室が4ユニットあり、同時に4人の細胞

## 【骨髄幹細胞を用いた脳梗塞治療】



調製も可能。札幌医科大学医学部教育研究機器センターの目玉として、多くの臨床試験での活用が期待されている。

CPC施設外観と施設内細胞調製ユニット



## 寄附金のご案内

札幌医科大学では、医学教育研究の充実・発展に役立てるため、法人や個人の皆さまからご協力・ご支援をお願いしております。また寄附金の中から、毎年、本学研究者への学術振興助成事業を執行し、医学研究振興の一翼を担っております。

※寄附金の問い合わせ先:  
札幌医科大学附属産学-地域連携センター寄附金担当  
代表 011-611-2111(内線2228)  
Eメール:kihukin@sapmed.ac.jp